

氏名・(本籍地)	木村周誠(東京都)
学位の種類	博士(仏教学)
学位記の番号	乙第84号
学位授与の日付	平成22年3月15日
学位論文題目	天台人間観の基礎構造
論文審査委員	主査 多田孝文 副査 多田孝正 副査 坂本廣博

木村周誠氏 学位請求論文審査報告書

「天台人間観の基礎構造」

論文の内容の要旨

本論は、隋天台大師智顛(538～597)の「諸法実相」に関する様々な説示を仏教の縁起思想に基づく人間学として解明したものである。

本論は5章からなり、第1章「天台大師における法の理解」では、2節を設け本論全体を貫く筆者の基本的な着眼点を提示する。第1節では法華経方便品の「諸法実相」の「諸法」に対する智顛の解釈から、「諸法」の語が、単なる「存在・現象」ではなく、華嚴経に拠って「佛法」と無差と捉えられる「衆生法」及び「心法」を示唆するものとして理解されるべきことを示した。また、この衆生法・心法の「諸法」は「因果法」として把握され、因果の隔別によって六道四聖の「十界法」に類別され、その十界法の「一切法」の「體」として「実相」が把握されることを示した。

第2節では、「衆生法」と無差される「心法」の問題を論じた。「心」もまた内在的な認識主観として理解される「心」を示唆するのではない。因果隔別の「十界法」(衆生法・心法)の本源として、四悉檀因縁をもって「無明」・「法性」として分別説示される四句不可説の「理」を示唆するのである。「心」(理)に具される「一切法」は因果隔別の「十界法」であって、十種の実在界ではないことを論述した。

第2章「蔵通別円の四教の構造」では2節を設け、まず光宅寺法雲の十如是釈に対する天台大師の批判を検討し、十如是が「存在・現象」の一切を摂する範疇として用いられるのではなく、不思議三諦と同じく、「諸法実相」を開顕する「境妙」としての衆生現前の「境」(法界)に佛法界に至る「一切法」(十法界)が具され

ていることを開顕する法華経独自の「佛智慧門」(境妙)として理解されていることを示した。諸諦理には、対機の根性に応ずる浅深麁妙が存するために、蔵通別円の四教が分別されるのであることを論じた。第2節では『玄義』境妙段の七種二諦を取り上げ、これらの四教を概観した。特に別・円二教の「境」として説示されることに対する相違を論じた。

第3章「円教の解明」では、4節を設け、「境」と「智」の把握を試みた。円教では「一実諦」(中道・実相)が「待」(思義言説)を絶する「絶待」であること、言語道断・心行处滅の「不可思議」であることが開示されるとした。続く2節では、この「絶待妙」の開顕が、所観の「境」だけでなく、能観の「智」についても「一実相智」(智妙)であることを開顕することを考察した。

さらに、第3節「法華開顕と衆生」では、凡夫衆生、及び純根の三乗にのっとっての法華一乗の開顕の意味を考察した。

第4節「法華開顕と諸軌」では「一色一香無非中道」の語が、「実相」(妙理)の「一切諸法」における「不偏」(偏一切処)を示唆することを考察した。

第4章「不思議境と止観」では2節を設け『止観』破法遍の記述から、円教における従仮入空観・従空入仮観・中道正観それぞれの具体相を考察し、それらのいずれの場合も、「止観」は不思議三諦を円照する「一心三観」(双亡二辺・入中道・双照二諦)であることを考察した。

第5章「円教の修道論」では、2節を設け「諸法実相」を修習する「止観」が究竟妙覚の佛果を成ずるに至る「佛道」として把握されることを考察した。

第1節では『止観』及び『玄義』行妙段の記述から、「実相」を修習する「止観」（実相行）が、同時に任運無請のままに一切衆生に「実相」の樂を与える「実相道體」の如来慈悲を修習する「如来行」・「安樂行」（慈悲行）として把握されることを考察した。

第2節では、円教の場合も、「三十七道品」を行ずることが「佛道」の根本であり、四念処等の実修・実践において「止観」を修習することが「大乘円頓之道」として捉えていることを論証した。

以上、本論は、円融三諦・十界互具・一念三千といった独創的な諸表現を存在の真実相として前提する伝統的解釈、近現代の先行研究とは異なり、衆生が今まさに直面している無明一念心所生の「境」のあり方が論じられていることに着目するところに特色がある。智顛の関心は、「色」や「心」ではなく、生死煩惱の衆生として把握される「諸法」、さまざまな苦に直面する人間存在の「実相」（衆生法妙）を明らかにすることに向けられ、初心の行者自身が、不思議三諦や一実四諦として分別説示される「実相」に即して自己を把握し、現実生活のあらゆる場面において「止観」（実相行）の「佛道」を行じていくことを可能とするために、教観の二門に渉って、衆生自らが通入すべき「諸法実相」（理・佛智慧門）が示されるのであると結論している。

審査結果の要旨

天台智顛の人間観、衆生観を親撰と目される『法華玄義』『摩訶止観』、『維摩經文疏』『維摩經玄疏』等を中心的資料に解明したもので、宗学における教義論を踏まえ、確固たる思想研究とよぶべきものである。本論は智顛に諸著述があり、これに対する註釈末疏も数多く存在するが、親撰視される基本典籍に示される、教の構造と修道の体系の中に、直接的に智顛その人の人間観に対する視座を窺っていくを試みたものである。

本論は、天台智顛の諸著述を縦横に解読し、その複雑な思想構造を可能な限り明快にしようとする努力は認められるものである。全体として天台仏教を理解していると思われるが、新しい見解が読み取り難い。それは、基本典籍として用いた文献の既存の教義、思想研究の傾向性、著述の時代背景などについて問題点を端的に論述する必要があったのであろう。

智顛の生きた時代、いわゆる南北期は、仏教においても大きな特色を持っていたのである。南朝の貴族社会の中にあっては、魏晋朝になった玄之亦玄、虚無、自然、般若とは何かを求めた玄学の影響を受けて、儒教、道教、仏教の比較、融合を背景に言語を弄び、議

論を展開することに力点が置かれ、実践が軽視されがちであった。智顛の「玄義」もそれを意識しつつ、そこからの脱出を試みたものと見ることが出来る。

一方北朝は、皇帝即如来を旗印に、国家仏教を確立するため華嚴経、如来蔵を中心に置いた地論、摂論宗が展開され、唯心的仏教が盛んになっていた。そこに展開される仏教は例えば、僧肇の説く般若の世界とは異種の世界であり、唯識的な色彩を持つ。

南北南朝の特色である仏教文化の狭間の中で、般若波羅蜜の仏教を再認識しようとしたのが智顛の仏教であろう。

『摩訶止観』観不思議竟に“心起するには必ず縁に託す。”ということについて、“若し地師に従はば、即ち心に一切の法を具す。”若し摂師に従はば縁に一切の法を具す。“此の両師は各一辺に拠る。”と云い、更に“四句冥寂なりと雖も慈悲憐愍して名相無き中に於て名相を仮りて説くなり。”“言語の道断之、心行の虚滅す。”と説くのはその間の事情を物語るものであろう。

本論文の論旨は充実したもので、大体において正鵠を得ていると思われる。しかし、あまり言葉とか概念に固執しすぎると論旨そのものが地摂師の論法に戻ってしまいかねない。

例えば、智顛の仏教は円教を説くことにあるのか、はたまた一個人の人間として、不思議境の実現を目指し、努力し進むことを自覚させ目覚めさせることにあるのか等々、視点を少し変えてみると自分なりの論述の方法に工夫が出来、読む人が十分に理解されるように思える。

以上、今後の研究課題を提起されるが、本論文は智顛の「諸法実相」に関する種々の説示、いわゆる「天台実相論」を従来の枠組みで捉えるのではなく、仏教の縁起思想に基づく人間学として解明するところに正しく本論の特色が認められる。仏教に一貫する縁起思想の中国的展開を天台智顛に見る新研究といえる。よって学位請求論文として十分に認められるものである。